医業経営の現場から

file036　中国・四国地区

QOL を向上させる形成外科を地域で展開

地域のオンリーワン診療科として

草竹クリニックは、島根県出雲市中心部の新興住宅街で2016 年 1 月に開院、当初より想定以上の患者が訪れ、連日にぎわいを見せている。

草竹兼司院長は大阪出身だが、島根大学に残り、形成外科の専門医資格を取得すると、出雲に形成外科医院がなかったため、「患者さんを中途半端に放り出すわけにはいかない」と、この地での開業を決意した。

開業に備え、草竹院長は開院前から経営面も視野に入れ、美容外科の開設も計画した。それに伴う設備投資とスタッフの雇用を踏まえての収支計画について次のように話す。

「当院が美容外科を立ち上げた時点では、出雲旧市街には美容外科がなくオンリーワンでした。しかし、開業当初は美容外科を売りにしたくなかったので 1 年間は封印し、形成外科と皮膚科だけを標榜して、地域に当院本来の医療サービスを認知いただきました。その上で、美容外科は今年 3 月から表に出しました。今は美容外科がどんどん伸びているので、地元では歓迎されているようです」。

開院に備えての的確な市場分析と明確な計画に裏付けられた経営面での自信が感じとれる。診療圏についても「当初は出雲市～益田市、松江市ぐらいを想定していましたが、蓋を開けてみたら、岡山、大阪からも来院され、東は鳥取市内から来られる方もいます」と、潜在的なニーズの大きさに驚く。

形成外科の結果は患者が判断

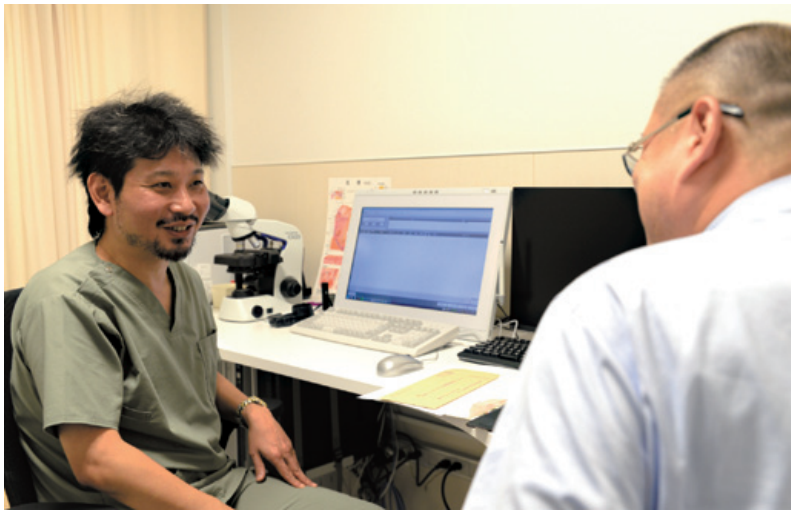
形成外科領域におけるかかりつけ医と患者の関係についてうかがうと、草竹院長は「勤務医時代はお子様の手術を多く手がけていて、今でも思春期を過ぎて通院されるケースもあります。ただ開業後はけが、できものの手術が主で、遺伝性のものではなく、大半は治療に終わりがあります。何年も通院される生活習慣病とは違って、1 つの疾患で半年、長くて 1 年のお付き合い。だからこそ、手術した傷がどう治るかが重要になります。ベストは“きれいに治る”ことですが、それを判断するのは私ではなく患者さんの目です。そんな風に結果がクリアに見られるのが、形成外科ならではの醍醐味です」と、形成外科の特性とやりがいについて話された。

創傷ケアと在宅診療

皮膚科・形成外科が在宅医療に関わる場合、主な対象疾患は

草竹クリニック　概要

■所在地
島根県出雲市上塩冶町 2663-1
■院長
草竹　兼司
■診療科
形成外科、皮膚科、美容



患者の QOL 第一の診療を心がけ、患者・家族と話す機会が多いという

施設内はカフェのようにリラックスできると同時に、大きな液晶画面には穏やかな風景が映し出され、子どもから高齢者まで苦にならない環境づくりを心がけている

院長　草竹　兼司 氏

2003 年島根医科大学医学部卒業。2003 年松江赤十字病院形成外科、2005 年島根大学医学部附属病院皮膚科、2006 年長崎大学医学部附属病院形成外科、2008 年島根大学医学部附属病院皮膚科、2013 年鳥取県立中央病院形成外科（非常勤）などを経て、2016 年 1 月草竹クリニックを開設。日本形成外科学会専門医、日本がん治療認定機構 がん治療認定医、日本褥瘡学会認定医。

寝たきり、座りきりなどに伴う褥瘡の治療となる。今のところ訪問診療は行っていないが、興味深い話をうかがうことができた。「褥瘡を含め創傷ケアの面白いところは、治療のゴールが人によって違うところです。たとえば、褥瘡を完全に治すには寝たままの安静時間が長くなり、制限ができることも少なくありません。そのことを車いすを利用される患者さんに伝えると、『それなら完全には治してほしくない』と言います。そこで、褥瘡を完全に治さなくても車いすの生活ができるケアの方法を教えてあげればいいのです。傷を悪化させず生活の質も落とさずうまく付き合っていける。その方法を、家族や施設の方にしっかり伝えて理解してもらうのも創傷ケアなのです」。

このように患者の QOL 第一の診療を心がける草竹院長は、開業後は特に、患者の家族や介護者と話す機会が多くなったと話す。「形成外科は“生き死に”を扱わない一方、QOL の維持・向上が根底にあります。さらに持って生まれた奇形を治したり、けがで失ったものを再生したり、傷との付き合い方をできる範囲で伝達するのが形成外科医だと私は思っています」。

患者の視点で改善すべき点を知りたい

クリニックの職員は、大学病院時代のスタッフで、大きな信頼を寄せている。だからこそ、働き方の改善をと、毎日定時に 1 人は帰ってもらう取り組みを始めたという。予約制の火・木曜日はオーバーワークをしないとの方針を立て、定時に帰る日と定めてもいる。

また、既知だからこそコミュニケーションにも心がける。「スタッフには、自分への意見や運営上、改善すべき点があれば遠慮なく言ってほしいと伝えています」と草竹院長。意見に耳を傾けようという姿勢は、院内のチームワークをしっかりと育んでいるようだ。さらに、「患者さんには礼儀を持って接するようにと、失礼がないようにしてもらう以外は、あまり細かいことは言わない」という草竹院長の言葉から、スタッフとの信頼関係の強さがうかがえた。

ところで医業経営コンサルタントには、「プロが見てどうかを正直に言ってくれることを期待しています」と話す。「お忍びで患者さんとして来てもらい、1 カ月後に“先生のところはここが駄目です”と言ってくれるようなコンサルティングをしてほしいですね。当院のポリシーに照らして受け入れられないこともあるでしょうが、まずは患者さんの視点で改善すべき点を一番知りたいのです」。

山陰地方では 1 台しかない痩身の機械

スタッフの方々と